

## 16. 魔のトライアングル

ヒミルコ將軍の船団が遭遇したかもしれない‘サルガッソー海’に関してお話ししましょう。

私も北米とアフリカのギニア湾沿岸、ナイジェリアのラゴス港、ガーナのアクラ港、コートジボアールのアビジャン港等を結ぶ定期航路に就航したことがあり、航路が必ずこの海域を航行しなければなりません。船乗りとしての腕は間違いなく上がる難コースでの度々の試練を受けましたから話にも熱が入ります。



この海域は‘魔のトライアングル’と呼ばれている海域の一部です。このトライアングル(三角形)はフロリダ半島の先端、アンチール諸島の東端プエルトリコ、大西洋の中心にあるバミューダ諸島を結んだ三角形を言います。100年以上前から記録されているだけでも100を超える船や飛行機、1000以上の人が消えている魔の海域です。

では何故‘魔’なのか、‘サルガッソー’なのか。浮遊性の海藻‘サルガッサム’はホンダワラ的一种ですが、これが大量に漂流しているのでサルガッソーの海と呼ばれるようになったのです。では何故‘魔’なのか、この海域には巨大な渦がゆっくりと流れております。そうすると流れ込んできた海藻類はこの渦の中を永遠に流れることとなります。

そうするとどんどん堆積することになり、かつ腐敗して溶けますから、海水が粘るような特殊な海水に変化します。ですから別名‘粘る海’なのです。

更に悪いことには亜熱帯の海域なので、無風地帯になり帆船は完全に動けなくなります。それが何日も続くと、飲料水、食料がつきてしまい、まず積んである馬を廃棄せざるを得なくなります。馬を積んでいたとは奇妙に感じるかもしれませんが、この当時寄港地における移動手段として馬を搭載していたのです。

この無風地帯は地球の回転に伴う大気の流れが原因ですから、発生する緯度は決まっています。そこで‘ホース・ラチチュード’(馬の緯度)と現在でも船乗り言葉として通用しております。動けない船には更に追い打ちをかけるように粘る海ですから海藻が絡みつきます。そうするとやがて乗組員は死に絶え、波静かな海域ですから船だけはボロボロになっても浮いています。映画‘パイレーツ・オブ・カリビアン’の幽霊船も実際にあったことでしょう。そしてフナクイムシに食い荒らされてから波間に消えていくのです。

この海域は‘魔’と呼ばれるのに値するように昔から海難事故多発地帯であり、それも奇妙な現象によつての海難事故です。

アメリカ人のパイロットが乗船したとき、自己の体験としてこの海域を航行中コンパスの

針が急に回転しだし慌てふためいたと実体験を語っておりました。

最高に奇妙な事件をお話ししましょう。第二次大戦が終結してまもなくの1945年12月この海域上空を編隊飛行訓練中の米海軍航空隊雷撃機‘アヴェンジャー’5機が遭難、緊急信号の発信もなく消えてしまった奇妙な航空機事故がありました。

このアヴェンジャーは当時は最高に優秀な雷撃機で初めて参戦したのがミッドウェー海戦、ついで第二次、第三次ソロモン海戦、マリアナ沖海戦、最後は大和を撃沈した武勲機で、わが海軍にとっては恨み深い雷撃機です。三座、1900hp、444km/hです。



行方不明になって、大搜索をしましたが、浮遊油、破片等全く見付からなかったのです。そして海軍当局を悩ませたのが、其の原因です。三座ですから通信士が座乗しており、各機に無線機を搭載してあり、それが5機ともに全く発信しないで同時に消えてしまったことに頭を抱えてしまったのです。ですから原因をつかめないまま当時本気になってUFO説が流れたのです。

スピルバーグ監督作品の秀作‘未知との遭遇’がありましたが、ご記憶の方も多数いらっしゃると思います。冒頭のシーンを思い出してください。風が吹くなかパイロットと整備士とが会話を交しているところから始まります。直ぐに時がながれ長閑な風景に変わるので一寸繋がらなかったのですが、最期のシーンが光輝く満艦飾のUFOの扉が開き、冒頭のシーンのパイロットがそのとき着用していたパイロットジャケットで降りてきたので納得しました。続いて誘拐された子供が降りてきて、怪しげな宇宙人がチラッと見えて‘The End’でした。



家族がTVを観ている時に上空にやってきたUFOがホバーリングして、子供を誘拐するのが光の中吸い上げられていくシーンでした。このとき観ていたTVの番組は‘十戒’で、モーゼがシナイ山を探し求めたように、母親は必死になって山を探し求めることになりませんが、その呼び寄せ導くのがシンセサイザーによる奇妙な音楽で非常に効果的に使っており、私には何故か宇宙からのモールス信号のように聞えたのです。

このように‘未知との遭遇’はこの事故をヒントにした映画ですが、その原因はUFOでないことは確かで、いろいろ原因追求をしておりますが、まだ明らかではありません。

ブラックホール説もありますがこれも空想の世界です。次いでマイクロバースト説ですが飛行機事故では現実におきていますが、この海域特有のものではなく、説得力に欠けます。またマイクロバーストは低空で発生するものであって、中空を飛行中の編隊に影響するとは

考えられません。

最期に残るのがメタンハイドレート説です。メタンハイドレートとはメタンを中心として周囲を分子が囲んだ形になる物資で、この構造を維持するためには環境が低温、高圧でなければならず、大量の有機物を含んだ土砂が低温、高圧の状態ですと長期おかれると氷状の結晶体になって海底に蓄積されます。これは世界中の海底に広く分布するもので、この海域に特に多いわけではありません。我が国近海にも分布しており、特に四国海盆の北辺、高知沖には有望なメタンハイドレート田があり、掘削技術が確立すれば次世代の新エネルギーとして活用されるでしょう。

メタンハイドレート説で考えると、このガスが大量の塊となって上昇した場合、無色透明ですから飛行機が突入してしまうとレシプロ・タービンどちらもメタンを吸い込み酸欠による不完全燃焼で浮力を失いますし、また軽いガス体ですから空気による浮力と違うので墜落するでしょう。搭乗員もガスを吸い込んで意識は瞬時に失ってしまうでしょう。一方、船舶の場合はメタンガス体が大量に海面近く浮上した場合、ガスですからメタンの泡になります。船の浮力は水の比重で決まり、つまりアルキメデスの法則により船の喫水下の容積と水の容積の比重が同じになるから浮いているのです。もし海面が泡だらけになれば船は瞬時に浮力を失い海に呑み込まれます。

船は比重が一寸でも違ふと浮き沈みするのです。例えば大西洋の場合、赤道付近と北へ緯度が高くなるほど沈み込みがあり、パナマ運河や五大湖は淡水ですから積載の限界を考慮して積載能力を計算しております。



船舶の中央部分の喫水線の上に小さな白線の輪があるのをご存知ですか。

これは満載喫水線を示すマークで、輪の中に何本かの線が描かれていますが、これは清水、赤道付近、北大西洋、北太平洋等海域別、季節別は夏と冬でそれぞれ水の比重が異なるので、喫水線の浮き沈みの限界を表示しているのです。このメタンハイドレート説ですと何となく説得力があるのですが、まだ納得するわけにはいけないのです。それは世界に広く分布していながらこの海域だけの現象であり、他の海域で同じような現象は全く例がないのです。もう一つ納得いかない理由は船は呑みこまれる理由は説明できました。しかしもう一寸疑問を持つと昔は全て木造船でしたからある程度沈むと水圧でバラされ数多くの木片は浮上するはずですが、其の痕跡が全くないのです。

もう一つ泡について身近な現象をお話ししますと、キャピテーション現象というのがあります。スクリューの回転を急激に上げると水の圧力が急激に変化し、強烈な圧力により水の蒸気分により気体に変化し水泡が猛烈に発生することがあり、そうすると泡が邪魔をしてスクリューの回転と水がかみ合わなくなり、船は前進しなくなります。

更に気体が高速で崩壊または振動し、それに伴って発生する衝撃圧力が固体表面、この場合は主にスクリューの羽が表面損傷、衝撃損傷の繰り返しで疲労破壊現象が起きることがあります。これを壊食現象（エロージョン）と言い、スクリューがボロボロになることがありますからご注意ください。その為に小型船舶にはスクリューの上にアンチキャピティーションプレートが付いております。

それでは何が原因なのか、サルガッソー特有の海藻が原因と考え、腐敗による有毒ガスの発生、それが海中に大量に蓄積され、其の塊が海面近くに浮上したり、空中を上昇したりする可能性があります。

映画‘もののけ姫’で眼に見えない透明の悪魔が山野を徘徊する不気味なシーンがありましたが、実体は二酸化炭素の塊でしょう。この塊は重いですから上昇しないで地表面を漂い、襲ってきたら全ての生物は確実に死に絶えます。この公害問題を訴える最高の映画でした。

‘もののけ姫’についてももう少しお話ししましょう。時代は戦国時代の初期、出雲地方の山中にあるタタラ場、オーナーは毛利家、戦いの準備として大量の武器を準備するためにどうしてもタタラ場が必要だったのです。タタラとは我が国独特の製鉄法で、高純度で当時世界最高峰の鉄刀を創り出していたのです。火山国特有の砂鉄の産出が豊富で、其の中心が出雲地方ですから、ここを支配していた山中鹿之助が活躍する尼子党との争いの因もここにあり、毛利家が勝利しタタラ場を独占支配したのです。

タタラ製鉄の行程は、伐採、運搬、炭焼き、砂鉄採集、炭焚き、タタラ踏み、鋳物、鋳物師と大人数による産業共同体を形成していたのですが、同時に大自然破壊でもあったから山の精の怒りを様々の形で表現していたのに共感を覚えました。

同じ出雲ですが、世界遺産に登録された石見銀山もまた尼子党と毛利家の争奪戦の対象であり、毛利家の勝利で支配下になって毛利家財力の支柱になっております。やがて秀吉の朝鮮出兵の軍資金となり、徳川時代にはいって幕府直轄となって、初代長官は大久保長安、凄い才人であつ謎だらけの人、武田家と徳川家に仕え、猿楽師、經理の天才、鉱山開発技術者としては天下一といわれて活躍した人ですが、出自は不明で多分中国からの帰化人ではないかといわれ、もの凄い派手な生活をして、やがてお家断絶になる物語は、またの機会にお話ししましょう。

ただこのガス体で推論すると痕跡が残らないのが説明つきません。もうひとつ情報をお話しすると、行方不明の5機のアヴェンジャーはつい最近になって偶然にダイバーが海底にある残骸を発見しました。調査したのですが墜落原因については何も発表しておりません。

ですから複合的な原因で起きる超常現象なのではないでしょうか。魔の海域は悪魔が住む神秘の世界、謎の世界にしておくべきなのではないでしょうか。